国指定史跡 斐太遺跡群 吹上遺跡

▲吹上遺跡から妙高山・黒姫山をのぞむ

▲勾玉と管玉

吹上遺跡（大字稲荷）は、弥生時代中ごろ（約 2200 年前）に勾玉や管玉がさかんに作られた遺跡で、ヒスイの勾玉の生産量は、全国でも有数の規模です。

遺跡は、古墳時代初め（約 1700 年前）まで、約 500 年もの長い間地域の拠点となる集落でした。

▲発掘調査のようす（平成 13 年撮影）

吹上遺跡出土品は、新潟県有形文化財に指定されています。

出土品の一部は釜蓋遺跡ガイダンスに展示しています。

▲吹上遺跡の出土品

地　図

地理院タイルにキャプションを一部加筆して掲載

吹上遺跡周辺の地形

吹上遺跡の周辺は、青田川が山から運んできた土砂がたまってできた扇状地が広がります。

扇状地はゆるやかな傾斜で水田に水を引きやすく、米作りに適した地形だったと考えられます。

年　表

西暦	時代区分	東アジアと日本列島のできごと・上越のできごと	斐太遺跡群		
			吹上遺跡	斐太遺跡	釜蓋遺跡
紀元前200年		青銅器が広まり始め（福岡県吉武高木遺跡など）、鉄器が伝わる			
紀元前100年	弥生時代中期	吹上遺跡で玉作りが盛んに行われる 近畿地方で環濠集落の規模が大きくなる（大阪府池上曽根遺跡や奈良県唐古・鍵遺跡）	■		
紀元後1年		中国の歴史書によると、このころ倭（当時の日本）は、百余国に分かれていた 吹上遺跡で玉作りが衰退する。吹上遺跡で方形周溝墓とよばれる墓がつくられる	■		
100年	弥生時代後期	57　中国の皇帝から奴国（九州にあったとされるくにの１つ）につかいを送り、「漢委奴国王」と刻まれた金印を賜る 吹上遺跡で大きな墓の周りに小さな墓がたくさんつくられる 丘の上の斐太遺跡で人々がくらし始める			
200年	弥生時代終末期	倭で従えていたくにぐにの争いがおこる 濠に囲まれた釜蓋遺跡で人々がくらし始める 239　卑弥呼が魏（中国）につかいを送り、魏の皇帝から「倭王」の称号と織物や銅の鏡を授けられる	■	■	■
300年	古墳時代前期	前方後円墳がつくられ始める（奈良県箸墓古墳など） 関川西側の丘の上に観音平古墳群・天神堂古墳群（妙高市）がつくられる	■		

■お問い合せは……上越市教育委員会　文化行政課　☎025-545-9269

玉作りがさかんだったころ（弥生時代中ごろ）のようす

▶吹上遺跡案内板

■発掘調査を行ったところ（県道部分）

現在、発掘調査を行った地点には橋がかかっていて、地下の遺構が残されています。

発掘調査では、勾玉・管玉作りの工房跡や、玉の製作途中で出た石くずを捨てた穴などが見つかりました。

石くずを捨てた穴

川跡

勾玉の工房跡

川跡

管玉の工房跡

溝

石くずを捨てた穴

石くずを捨てた穴

0　50m

国土地理院撮影の空中写真（平成２９年撮影）をもとに作成

吹上遺跡の特徴

①玉作りのムラ

吹上遺跡では、ヒスイの勾玉や、緑色凝灰岩の管玉などカラフルな玉が作られていました。

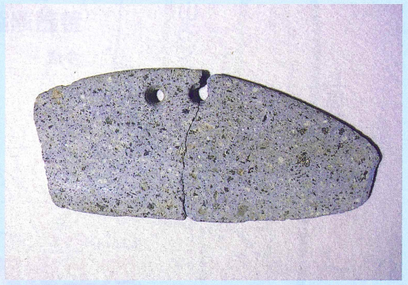
◀ヒスイ勾玉
製作途中の資料と工具

玉作りの様子（イメージ）

◀緑色凝灰岩管玉
製作途中の資料と工具

②米作りのルーツ

吹上遺跡では、米作りに使われた道具が見つかっており、早くから米作りが行われていたと考えられます。



「石包丁」は稲の穂をつむ道具として使われました。

▲復元した石包丁で穂をつむところ

③各地との交流

吹上遺跡で見つかった土器のうち、白っぽい土器は富山県や石川県（北陸系）、赤茶色の土器は長野県のもの（中部高地系）に似ています。そのほかに西日本や東北など各地の土器も見つかっています。

▲白い土器（北陸系）

▲勾玉と管玉

▲赤い土器（中部高地系）

玉の材料となる石は、ヒスイは糸魚川産、緑色凝灰岩の一部は佐渡や小松産のものが使われていました。完成した玉の多くは、長野方面へ運ばれたと考えられています。